



Title	職業科高校生の生活諸過程と仲間集団
Author(s)	小西, 二郎
Citation	北海道大學教育學部紀要, 61, 219-222
Issue Date	1993-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29413
Type	departmental bulletin paper
File Information	61_P219-222.pdf



職業科高校生の生活諸過程と仲間集団

小 西 二 郎

A Case Study on Life Processes of High School Students and their Friendship Groups

Tsugio KONISHI

1 問題の所在

青年（若者）期になると子どもたちは、親、教師といった大人との関係の再構成と、自分たちの世界の構築とを関連させながら推し進め、独自の価値意識を形成するようになる。この自立化（社会的成長）過程において仲間集団が重要な役割を果たすといわれている。教育学者の竹内常一氏は、〈自分くずし・自分づくり〉の過程としてその実態を把握する。すなわち、友人関係の形成・解体・再形成を通して自己の形成・解体・再形成を行なうことが社会的成長だというのである。しかしながら、「能力主義」を代表している親や教師に縛り付けられた自分を壊すことが〈自分くずし〉であり、子どもたちの社会的成長にとって第一義的だとする点⁽¹⁾には疑問を感じる。なぜならば、第1に親や教師は、「能力主義」の論理に全面的に包摂されているわけではないからである。そして第2に、様々な社会的行為を通して自己に対する信頼を獲得することが何よりも重要であり、この自己信頼を基盤とするからこそ個々人は自己をつくり変えようという意志を持ち行為するようになると思われるからである。

修士論文では、多様な社会関係における様々な経験を通して自己を理解・評価する中で自己信頼を獲得し、それを媒介にして自己を変えようとする過程を社会的成長と措定した。そして北海道小樽市にある道立A工業高等学校（以下A工と略する）3年造船科の生徒38名を主な対象にして、彼らの社会的成長の実態と論理、そこで仲間集団が果たす役割を考察することを課題とした⁽²⁾。若者の仲間集団に関する従来の研究は、学級集団内に分析射程を限定したり、あるいは学校外において形成された仲間集団のみを問題にして家族、学校、職場との関わりを捨象している。しかしながら、これでは社会的成長と仲間集団との連関の実像をとらえることはできない。というのは彼らの生活は、学級集団内で完結するのでも、学校外生活だけで完結するのでもないからである。すなわち彼らの生活諸過程は家族、学校、職場（アルバイト）、仲間集団との連関を統合しようとする過程として展開しているからである。その積み重ねが生活史であり、個々人は自らの生活史に規定されながらも、そこに存する経験内容を基にして新たな行為を能動的に企てると考える。ゆえに修士論文では、既存の発達段階を決定的なものとする生活史決定論とは異なるパースペクティブから、A工入学後の彼らの生活史を分析対象とした。

2 生活諸過程の特徴

学校間格差構造においてA工は「中の下」に位置し、しかも造船科はA工のなかで「底辺」の学科である。それゆえA工の他の科に合格できず、第2志望で進学してくる人が3分の2弱も占めている。かかる二重の「輪切り」によって選別されたため「落ちこぼれ」意識を抱く人が

多く、そのために退学を考えた者さえ存在した。こうした生徒たちに対して教師集団は、彼らが「落ちこぼれ」意識を克服し「胸を張って卒業していく」ことを学校運営・指導方針の基軸とした。教科指導において教師集団は、造船関係だけでなく機械工学の基礎的知識・技術やコンピューター関係を教え、建築業や土木業にも応用がきくことを生徒たちに示してきた。それに対応して進路指導部は、造船科の幅広い専門性を企業にアピールし、かつ離職者が多い、あるいは労働条件が劣悪な企業に対して意見してきた。そのためここ数年で就職状況は好転し、生徒たちは就職に対して明るい見通しを持つようになった。生徒指導の面では、生徒会活動や部活などを生徒自身が自主的に運営することを奨励し、しかも学校外生活に対して特に規制を設けることはしない。つまりA工の教師集団は、学校生活や学校外生活を生徒たちが自主的に展開することを保障しているといえるのである。担任は、このようなA工の教師文化を体現している。彼は、生徒たちがコンプレックスを克服することを学級運営の主眼とし、かつ民間企業で12年間働いた経験を生かして生徒一人一人の個性にあった進路指導を造船科の教師集団と連携して行なってきた。

以上のように生活諸過程を多様に展開し得る状況に造船科の38名はある。では、その実態はどうなっているのか。まず家族生活についてみる。彼らの親の多くが地元の中小企業に勤めている。職業階層別にみると現業労働者層がほぼ半数、所謂ホワイト・カラー労働者層が3割弱、漁業・都市自営層が約1割をそれぞれ占めている。母親のほとんどが働いており、M型就労パターンの第2のピークに達している。そして母子家庭が4ケース、父子家庭が2ケース、両親ともに無職が1ケースの計7ケースと、経済的精神的に困難な状況にある家族が約2割(18.4%)を占めている。親子関係についていうと、彼らは親と距離を置き、それと反比例して家族外に生活の重心を置くようになっている。とはいっても両者の間に溝はない。進路選択といった重要な選択の際には親に相談できるような信頼関係が親子の間に伏在しているのである。

それでは、彼らの生活の中軸となっている家庭外の生活はどうか。家庭外の生活は、学校生活と学校外生活で構成されている。まず学校生活についてみよう。高校生は、学級を1つの軸として学校生活を営んでいる。そこで、学級集団の構造をとらえることにする。この学級集団には、6つのインフォーマル・グループが存在することがわかった。それらをA、B、C、D、E、Fとして、それぞれのグループの特徴を示すと以下ようになる。A(メンバーは8名)は「真面目で成績がいい人の集まり」、B(メンバーは9名)は、学級自治において中心となり、部・同好会活動でも積極的に活動する人たちのグループである。C(メンバーは3名)の実態はバンド、D(メンバーは8名)は学級自治においてBに追随しているが、部・同好会活動には消極的なグループである。F(メンバーは8名)は「一番おとなしいグループ」である。グループ間の関係についていうと、Aはグループ内で固まる傾向があるのに対して、C・D・F相互の親和性は高い。Bは、Dと若干の親和性がある。一方、E(メンバーは2名)はこの学級集団では孤立している。

では、学校外生活はどうか。彼らの約8割がアルバイトを経験しており、その中でAとF以外の人たちのほとんどが長期間に渡って就労をしている。つまり、彼らの日常生活においてアルバイトは半ば常態化している。そして彼らの交友関係は、小中学校時代からの友人関係の上にクラスメートや部活仲間、アルバイト仲間などが重なり合い、相互に関連し合う重層的な構造を成している。

3 社会的成長と仲間集団

A 工時代の約3年間の中で、彼らのほぼ全員が精神的に成長したと自己評価する。つまり、「落ちこぼれ」意識を克服し、自己に対する信頼を獲得したのである。その契機としては「仲間集団」の選択率が一番高く、次いで「アルバイト」や「部活」、「先生との交流」などと続き、彼らの生活諸過程の諸局面に及んでいる。それでは、彼らの仲間集団とはどのようなものか⁽³⁾。仲間集団を有していない6ケース以外の人たちについて、メンバー構成の特徴を示すことにしよう。A 工生以外の人と仲間集団を構成している人が5ケース、A 工生以外の人とクラスメート以外のA 工生の人とで仲間集団を構成している人が4ケース、クラスメート以外のA 工生と仲間集団を構成している人が4ケースであるのに対して、クラスメートをメンバーとする仲間集団を有する人が19ケースあり6割近く(59.4%)を占めている。しかもこのうち13ケースが、仲間集団での交流によって精神的に成長したという。つまり、対象者全体の半数の人たちが学級集団内で仲間集団を形成し、かつその多くが仲間集団での交流を通して精神的に成長したのである。

次に、彼らの社会的成長の実態について考察しよう。社会的に成長した36ケースについて、クラス内グループとの関わりでみると以下ようになる。仲間集団以外を精神的成長の契機とし、それが学校生活とアルバイトに存する「学校生活非限定型」は6ケースで、A 以外のグループに分散している。同じく仲間集団以外を精神的成長の契機とし、それが学校生活のみに存する「学校生活限定型」は7ケースで、そのうち6ケースがA とFのメンバーである。一方、仲間集団での交流を精神的成長の契機とするも、その意味内容を意識化し得ていない「非顕在型」は9ケースで、とりわけD に集中している。そして仲間集団での交流による精神的成長の意味内容を意識化し得ている「顕在型」は14ケースを占める。このタイプは、A・Fのメンバー5名とBのメンバー5名にほぼ二分されている。前者は、学級集団内で形成された仲間集団での交流によって成長したのに対して、後者は、学級集団外で形成されたそれによって成長したという傾向を示している。精神的成長の論理内容についてみると、前者の場合、〈危機的状況の際に支えられた〉・〈自分の性格をとらえ直し変えるよう試みる〉というものであり、後者のそれは、これらの論理に加えて〈相互評価の大切さを自覚するようになった〉・〈協力し合うことの重要性を認識するようになった〉というものである。しかも後者のケースは、学校から離れることなく仲間集団で培った力量を学級自治におけるリーダーシップに生かしている。いずれにせよ「顕在型」のケースは、仲間との交流のなかで相互に受容・理解し、評価し合うことによって自己に対する信頼を獲得している点で共通している。(C は解体の時期にあるため、メンバー3人の精神的成長におけるCの重要度はそれぞれ異なる。学級集団で孤立しているEの2人は、A 工生以外の人と構成している仲間集団、アルバイトをそれぞれ精神的成長の契機としている。つまり、学校外に準拠点を求めているのである。)

4 ま と め

彼らは、生活諸過程における多様な経験を通して社会的成長を遂げている。とりわけ仲間集団をその契機とする場合、個々人の内面レベルにまで達したものとなっている。すなわち、仲間集団における交流によって相互に受容・理解し、その上で相互に評価し合う。この回路を通して自己に対する信頼が獲得され、それを基盤にして、自己の改変に向けて積極的に行為するようになっているのである。

今後は、高校時代に獲得した自己信頼が、実社会に参入してからの生き方にどのように関わるのか、この点の解明を課題としたい。日本における、若者の“学校から職場へ”の移行過程は、ポール・ウィリスが分析した〈野郎ども〉や〈耳穴っ子〉のそれ⁽⁴⁾と重ね合わせて理解され得るものではない。ポスト・フォーディズム段階における若者の社会的成長過程としてこの問題をとらえかえす必要がある。そしてこの問題にアプローチすることが、若者の社会的成長と地域社会の内発的發展との連関を明らかにする糸口を見出だすことにつながるのではないかと考える。

〈注〉

- (1) 竹内常一『子どもの自分くずしと自分づくり』東京大学出版会、1987年。竹内常一「生育史の中で子どもをとらえる」、全国生活指導研究協議会編『生活指導』明治図書、No. 305、1982年11月号。
- (2) 本研究の対象者は生徒（全員男子）のほかに担任、造船科長、進路指導部長、生徒指導部長、生徒指導部生徒会担当教諭である。生徒に対しては1991年11月に本調査を、1992年12月に追跡調査を実施した。本調査は、調査票を用いた面接・聞き取り調査である。追跡調査では、A工卒業後就職した31名全員に対してアンケート調査を、またその中で小樽市に居住している人に対しては面接・聞き取り調査も合わせて実施した。アンケート調査の有効回収数は9、面接調査のそれは7である。教師調査は、調査票を用いた面接・聞き取り調査で1992年3月に行なった。
- (3) 本研究における友人関係と仲間集団の把握は次のようにして行なった。まず、「クラスメート」、「部活が同じ人」、「クラス・部活以外のA工生の人」、「アルバイトで知合った人」、「出身中学が同じA工以外の人」、「その他の関係の人」のそれぞれの場合について親しい友人をお聞きし、次にその中でグループになっているもの（友人グループ）を指摘して頂いた。そしてそれらの友人グループのなかで「一番大事で意味がある友人グループ」（仲間集団）を教えて頂いた。
- (4) Paul Willis, *Learning to Labour*, Gower, 1977（熊沢誠・山田潤訳『ハーマータウンの野郎ども』筑摩書房、1985年参照）。